

# 巻頭言

## 日本放射線技術学会 第68回総会学術大会は未来への先導となったか

日本放射線技術学会第68回総会学術大会 大会長  
大阪大学医学部附属病院 医療技術部 部長  
土井 司



土井 司 先生

### 1. はじめに

JRC2012は、4月12日(木)から15日(日)の4日間にわたってパシフィコ横浜会議センターならびに国際展示場、アネックスホール、国立大ホールにて開催された。2012年は冬が長引き3月末まで寒い日が続いたおかげで桜の開花が遅れ、私たちの大会を歓迎するかのよう、この時期には珍しく桜の花満開の下での開催となった(Fig.1)。



Fig.1 実行委員会室からの桜

### 2. 大会テーマ

放射線診療・放射線技術科学の発展には、基礎を知り原理を究めることが重要であり、本大会がその礎となって診療と技術開発の未来を創造することを祈念して「未来への先導～放射線診療の核心に迫り未来を展望する～」という大会テーマを掲げた。その中で放射線技術科学を志す者は、患者に直接医療

を提供する放射線診療と放射線技術科学の根源を開発・究明する医学物理、そして装置を開発・製作するメーカーの仲立ちとなって、より良い診療ができるために、装置をより有効に臨床に生かすための技術的なアドバイスや問題点の解消をより発展的に行う使命を持っていると考えている。

### 3. 大会長を引き受けるにあたって

今大会長を引き受けるにあたり、実行委員会結成当初から内部にも外部にも「技術学会の学術大会を変えたい」とはばかりず発言してきた。「研究発表の質を向上させ、学術大会のレベルを上げたい、そして効率的な運用をしたい」と常々思っていたが、演題申込者の感情への配慮と参加登録者数の減少に対して明確な打開策がなく、大会準備段階で構想にあがっていても、実現には至らなかった。ただ、私が大会長に選ばれたことで、早々と演題採用基準が厳しくなるという風評が流れたことも事実である。世の中、期待と不安が入り交じった状態であったと思う。

このような状況の中、代表理事をはじめ企画委員会、学術委員会、倫理委員会、プログラム委員会など私の気持ち同様に学会を新たな方向に導きたいと思っている多くの仲間の声が共鳴した結果、いろんなチャレンジをさせていただく機会を得た。これを私は学会誌第68巻2号(2012年2月発刊)の巻頭言で「豹変」という言葉で表している。今日では、「穏やかであったものが急に牙をむく」というような意味でよく用いられるが、本来は「美しい模様を描く豹の皮のように美しい方向に絶えず変化する」という意味だという。つまり、今までの自分

から脱皮し時代の変化に柔軟に対処し、新しい自己を創造することが成功への道標である。という「豹変」を本学術大会に示すことができればと考えていた。

## 4. 変革

### 4-1. プログラム審査

まず、プログラム編成にあたって、「CT」「MR」の並列での口述発表をしないということを宣言した。シンポジウムや専門分科会も同列に入ってくるので、最大の口述発表は127題になった。昨年まで、約200題の発表申込みがある分野を60%の採択率にしなければならない。他の分野との整合性を図るために、全ての分野での口述発表の採択率は約60%とすることを決めた。ここから外れた演題をCyPosと不採択に分類することにした。

以上のように区分するには厳正な審査をすることと、そのための環境を整える必要があった。演題募集をする時点からこれらのことを公言しないといけないので、演題申込みシステムやフォーマットを大きく変更した。まず非会員の演題申込み料の廃止、そして演題投稿区分を学会誌の論文区分と同様にする。キーワードの新設、抄録を500字に縮小し、その代わりに300字で投稿演題の新規性を記載していただき、演題審査とプログラミングをしやすくした。審査にあたっては、プログラム委員長をはじめ演題審査委員の方々に多大な協力をいただいた。

審査の結果、口述発表：451題、CyPos：228題、不採択・取下げ：43題となった。研究発表以外のイベントは4530分であり、全体の47%を占めた。

### 4-2. 事前参加登録と事前スライド受付

会員から要望の高かったCyPosの事前閲覧を可能にするために、事前参加登録を復活させた。初日から直接学会場に行けるという優位性はあるものの、登録料は当日登録と同じであるうえに払込手数料は自己負担であるので、その優位性に疑問が呈された。しかし、会員：1649人、学生：154人の合計1803人ももの事前登録をしていただき、会員の予習熱の高さと大会への理解がうかがえた。

さらに、PCプレビューセンターの混雑緩和を目的に口述発表スライドの事前受付システムを初めて採用した。研究発表に対する取り組み方が論議される中、451題の口述発表のうち431題に事前受付(95%以上の達成率)をしていただき、効率的な学会運営に大きく貢献した。

### 4-3. 予稿集

予稿集も表紙から変わった。元々表紙も変えるつもりだったが、日本放射線技術学会のロゴマークに使用制限があって、決められた色と形式しか使えないことが直前に判明したこともあって、今回特別講演をいただく江戸東京博物館から借用したデータを表紙に加え、目次を次のページに移動させ「R」の透かし文字を入れた。裏表紙も私が撮影したパシフィコ横浜の写真と交通案内にした。プログラムの掲載順序も私の独断と偏見で、次のように順序を入れ替えた。「宿題報告」→「瀬木賞講演」→「土井賞講演」→「シンポジウム」→「教育講演」→「専門分科会」→「入門講座」→「専門講座」→「技術活用セミナー」→「海外学術交流講演」→「フォーラム」→「学校対抗イベント」→「口述発表」→「国際発表」→「CyPos」→「各抄録」→「ITEM出展社からのキャッチコピー」。最後のキャッチコピーは、メイン展示と会社のコンセプトを会員に伝え、多くの方がITEMに行っていただくように考えた私のアイデアである。ITEMも史上最高の21,000人を超えたと聞く。また、見開きのプログラム表も各会場の掲載行が日ごとにあまり上下しないように工夫をした。CTやMRなど、会期中ずっと同じ部屋で開催する分野は見やすくなったと思う。抄録が500字になったことで、予稿集が少し軽くなったことも好印象であった。

### 4-4. プログラム

開会式は第71回医学放射線学会総会会長の栗林先生の発案で、マルチ画面で各大会長が10分程度でこの大会への思いを語ることになった。私は、本大会の内容よりも日本放射線技術学会の学術大会は新しい方向に向かっていることと、本大会も含めて、これを可能にしているのは強力な支援と学会を支える皆のチームワークであることを強調した(Fig.2)。特別講演には江戸東京博物館から市川寛明先生を

迎え「江戸の知恵に学ぶ～寺子屋の学びと現代～」というタイトルで現代に通じる教育制度について講演をいただいた。その他、宿題報告:2, 瀬木賞講演:2, シンポジウム:4, 教育講演:9, 専門分科会:9, 入門講座:11, 専門講座:12, 技術活用セミナー:12, フォーラム:5のイベントがあった。

シンポジウム3では「MRの発展を支える基礎技術～温故創進～」と命名して、長年MR装置を使ってきた者として、未来に向けて伝えたいことを新進気鋭の5名の方に代弁していただいた(Fig.3)。秋季大会時に開催された第1回放射線技術科学会議に引き続いて企画した英語づけ国際発表も18題の演題があり次につなげることができた。

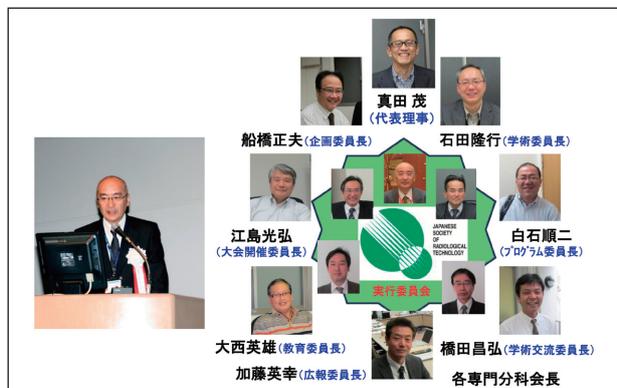


Fig.2 基調講演を行う私と私の超強力支援隊



Fig.3 シンポジウム3「MRの発展を支える基礎技術～温故創進～」

口述発表は、CTは503室、MRはアネックスホール203+203室に固定して会期期間中開催した。他の分野もできるだけ会場がまたがらないように考慮した。14日(土)の501室は終日入門講座とし、専門講座は昼のランチ付きを基本とし、前後の発表やイベントと関連付けるように配慮した。しかしながら、CTとMRは朝の8時から発表を入れざるを得なくなり、ちょっと厳しかったかもしれない。

初めての試みであった学校対抗学生イベントは、日曜日の午後ということで少し参加者が少なかったが、参加者が自ら採点することで受賞者を決定するという企画は成功したと思う。学生さんの発表はいずれも優秀で、通常の賞とのダブル受賞になった

方が5人もいたことに学生発表のレベルの高さを感じた。

閉会式は例年になく多くの会員が会場に来ていただいた。多くの表彰者が壇上にあがり大いに閉会式も盛り上がった。13日(金)午後からの受賞者の広報を会場の空き時間にスライドで受賞者を放映したのが功を奏したのだと思う(Fig.4)。



Fig.4 閉会式での銅賞の表彰

## 5. 会場と参加者数

入門講座や英語発表の仕方など朝早くから開始したにもかかわらず、どの会場も早々に立見が出るなど終始熱気に包まれた。しかしながら、収容率が100%を超えたのは16セクションのみで平均収容率は66%だった。CTに使った最も広い503室は、椅子を横並び4列にし通路を多くするなど、多くの人が座りやすくなる工夫を凝らしたにもかかわらず、多くの会場で立見が出てしまった。もっと声を大にして着席を呼びかけるべきであった。

今回初めて取り入れた質疑応答のみのCyPosであったが、十分ディスカッションができたという意見の反面、入りにくさなどの改善を求める声もあった(Fig.5)。



Fig.5 JSRT CyPos 質疑応答会場

参加登録者数は事前登録1670人、1日目586人、2日目803人、3日目773人、4日目144人、合計4524人(内学生548人)で演題数削減による参加登録者への影響は、減少するどころか一昨年を上回る結果となった。

## 6. おわりに

昨年のweb大会で実現されなかったシンポジウムと瀬木賞講演をひとつずつ加えて普段の大会よりイベントが多くなったものの特別講演は1つしか設けなかった。しかしながら、14日(土)のほとんどがイベント企画となり、12日(木)に多くの口述発表を当てることになった。いずれの会場も会員で埋まり大会的には成功であったと思うが、4日間開催でないと消化しきれないという問題がでてきている。

いずれにせよ本学術大会が技術学会の学術大会が抱えていた今までの大きなハードルをひとつ超え、新たな方向へと舵が切れる試金石になったと思う。最終日の夕刻、大会開催委員長を含めて実行委員一同、無事終えることができ満足感に浸れたのも、本会の意向にご理解いただいた第71回の本医学放射線学会総会会長 栗林幸夫先生をはじめ第103回日本医学物理学学会学術大会大会長 尾川浩一先生、

日本画像医療システム工業会会長 加藤久豊様、日本ラジオロジー協会のスタッフの皆さまのご支援のおかげだと思っています (Fig.6)。不肖わがままな私を最後まで支えていただいた多くの皆さまに心から御礼を申し上げます。



Fig.6 左から第103回JSMP学術大会彌富実行委員長、第71回JRS総会陣崎実行委員長、JRC山田代表理事、第71回JRS総会栗林会長、筆者、第103回JSMP学術大会尾川大会長、JIRA加藤会長、JSRT第68回総会学術大会錦実行委員長